聞名仏教

第 130 号　　毎月発行
（発行日）2021 年 7 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/
振替 00930（7）146886

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

禿顕誠師

佐々木蓮麿

私は幼い頃から「綺田の源通寺さんは、近代稀に見る名師である」と亡父から懇々と聞かされていたので、ぜひ一度お訪ねして、その徳風に接したいと念願していたのでありました。時節が到来して、谷大の本科一年の冬、たしか二月十一日であったと思います。友人二人を誘うて、湖南桜川のほとり綺田の里を訪ねたのでありました。ところが、その部落に入って先づ第一に感じたことは、出会う部落民のすべてが、見知らぬ私達学生に対して、ていねいにお辞儀をされたことです。後から聞きますと、それは禿顕誠老師の無言の感化によるものだということです。

やがてお寺の境内に入ると、先づ第一に目についたものは、香樹院講師の分骨塔でありました。禿老師は深く香樹院師に帰依して、終生その法話や語録を読み通して自己の信念確立と、行業の策励とに余念がなかったものですから、わざわざ越後の無為信寺（香樹院のお寺）から分骨を奉戴して源通寺にその塔を建てられたと聞いています。境内の清掃はよく行き届き、諸国から集まってきた同行十数人は、専ら念仏もろとも本堂のお掃除をしているのでありました。早速、禿老師に来意を伝えてもらったところ、しばらくして黒衣白服の老師が念仏もろともおいでになって

「あなたがたは、若い学生さんでありながら、はるばる京都から雪の中をここまで聞法に参られたと聞いて頭が下りました。私は古希の齢を過ぎ、たった今、死んで行かねばならぬ身でありながら、今なお娑婆に心を引かれて念仏は忘れがちになっている有様で、ただただ愧ぢいるばかりであります。しかし香樹院さまのご化導を頂けば、その心にとりあわず、たゞ念仏を喜べと仰せられるので、ほそぼそながら念仏しているのみです。もし心得違いがあっては大事ですから、ご意見をして頂きたい」と言われたのには、口が塞いで、言うことばを知らなかったのであります。

師の居間には机のうしろに屏風が立てられて同行の姿が見えぬようになっていて、師は専ら香樹院の法話を読んでいられるのみで、同行連中は屏風の後ろに坐って師のお声を聞いているのみです。この単調な風景の中に、人を引きつける魅力のあるのが不思議です。師の生涯の厳誡は、「人に向えば自分の一大事を忘れる」という極めて厳しいものであったのです。

あるとき、お座敷で師のお話しを聞いていたところ、本

堂で役僧が、香樹院の法話を読んでいるのが師の耳に入るや、師は直ちに坐をけって本堂に走り、専ら聞法されるのには驚きました。私は今まで、幾多の名師や同行に会いましたが、禿老師ほど、貪ぼるように聞法する人に出会ったことがありません。一晩、お寺で泊めて頂いたことがありましたが、本堂に参詣している同行の口から、念仏以外の言葉を耳にしたことがありませんでした。こんな風景も、ちょっと他で見ることはできまいと思います。

あるとき檀家総代が師に向って「近来、各地から信者が集まってくるので、宿舎を建てては如何でしょうか」と申し上げたところ、師は即座に「そんなことを考えるのは、まだ二年も三年も生きているつもりだろう、今晩にも知れぬ命と思えば、そんなことを考えている余地はない」とハネつけられたそうです。なんという切実な態度でしょうか。

かつて大垣のある女同行が、九州の臼杵（うすき）に隠居しておられた広瀬講師を訪ねて、一週間ほど滞在して帰国する途中、綺田の源通寺に立ち寄り、禿和上にお目にかかり、「私は九州の広瀬講師をお訪ねしてご化導にあづかり、今その帰り道ですが、一度、和上様にもお目にかかってみ教えを頂きたいと思って参りました」と申し上げると、禿老師は恭（うやうや）しく、その同行の前に両手をつき、「あんたは、なんという尊いことか、美濃からはるばる九州まで法を聞きに行かれたとは。この老僧は、とてもそれだけの勇気のないのを愧（はず）かしく思います」と述べ、なお言葉をつづけて「では広瀬講師から、どういうご化導を蒙（こうむ）られたか、一口なりとも聞かせてもらいたい」と申されるので、今の同行は、何を話そうか、と迷っておりましたが、広瀬講師にお別れするとき「私も老体ゆえ、再びお会いすることはむつかしいと思いますから、どうぞ最後に一言聞かせて頂きたい」と申し上げたところ、講師が仰しゃるには『これからはなぁ、人にとりあわず、自分一人で念仏を喜びなさい、そうすると、ご開山さまにお出会いすることができるぞ』と申されました。と答えると、禿老師は非常に喜ばれて「まことにありがたいことを聞かせてもろうた。その言葉は、あなたが聞いてこられたのではあるが、私がもらっておきます」と申されたので、今の同行は「なんだか自分が聞いてきた広瀬講師のおことばを禿和上から取り上げられたような気がしましたが、禿和上のおことばで、また一層、広瀬講師の最後のおことばが身に引き受けて喜ばせてもらいました」と述懐しておりました。

禿顕誠和上の息子義峰（ぎほう）師も、和上の感化を受けて、その遺風（いふう）を承けついで行かれたのでありましたが、師が真宗大学に在学の頃、ある学友が「僕も一度君のお寺に遊びに行きたいのだが、どうも半狂気（はんきちがい）の老僧がおられるので行く気がしない」と語ったことを和上が聞かれて

「いかにも、その通りじゃ、わしは半狂気じゃから自分にも困っている。本狂気になれたらよいのだが、なかなか本狂気（ほんきちがい）になれぬので困っているのじゃ」と言われたそうであります。この和上の述懐には深く味うべきものがあると思います。時々遠方の同行から「一度お寺にお参りして、和上様のご化導にあづかりたいと思いますから、その節はよろしくお願いします」という手紙を出すと、和上からの返事は、いつも決ったように「私は全くの評判だおしじゃ、

人の評判を聞いて来られても、必ず失望されるであろうから、中止されたがよろしかろう」と書き送られたそうですが、それでも強いて訪ねてくる同行があると、その同行の帰えるときには「来てみて、いよいよ狸坊主（たぬきぼうず）ということが分ったであろう」と言われたそうであります。和上があるとき述懐して申されるには「私はかつて仏前の荘厳（しょうごん）等に心を入れたこともあったが、今から考えると余計なことをしておったように思う。寸時（すんじ）を惜んで聞法しても、なお足らぬばかりの自分であった云々」と。まことに禿和上の熱烈な聞法の態度と、その厳しい自己否定の精神には全く恐れ入るばかりであります。（了）

【住職雑感】 六月下旬、香川県の従兄弟が亡くなり、早朝「葬儀の勤行に出席してほしい。通夜は今日の夕五時から」との電話があって、急いで支度をして坊守の運転で出かけ、午後四時頃葬儀会館へ到着。既に親族が集まっていた。久しぶりに会う人たちばかりである。通夜は真宗興正寺派のお勤めで始まった。真宗でも派が違うと導師さんの声明についていくのにやっとであった。一泊しての告別式。参列者は百人以上で大勢の参列者であった。花輪もずらりと並べられていて、久しぶりに葬儀らしい葬儀であった。葬儀の後、妙好人で有名な庄松同行（一七九九～一八七一）ゆかりの地を訪ねる。庄松さんは鈴木大拙博士によって日本はもとより世界にも知られるようになった。庄松さんの檀那寺である三本松の勝覚寺（興正寺派）に行く。境内は広いが、無住で住職は居られず、本堂は閉まったままであった。本堂も山門も立派だがいささか荒れている。境内の庭にある庄松さんの銅像にお参り。その後離れた処にある小砂（こざれ）説教場を訪ねる。庄松さんが日頃聞法していた所である。丁度、管理をしている方（興正寺派門徒）にであって案内をしていただく。小さな説教場に着くと、庄松同行の立派な墓があった。説教場も墓もお同行たちによって大切に管理されていた。明治四年に亡くなった庄松同行の信徳が今に続いていることを肌で感じたのであった。

仏様とは何か

いただいた質問の

⑤「私たちは仏になれるでしょうか？」

⑥「なんで私が仏さまになれるのですか？」

ですが、今回は⑤「私たちは仏になれるでしょうか？」の質問ですが、⑥の「なんで私が仏さまになれるのでしょうか」の問いと重なると思いますので⑤と⑥とを一緒に考えたいと思います。それで今月は真宗でいう「仏とは何ぞや」「仏になるとはどういうことか」を述べてみます。

「仏とは何か」ということですが、これについてもいろいろな言い表し方があります。仏とは仏陀とも表記され、仏陀とはインド語では「真理にめざめた方」のことを言います。真理に目覚めた方で、歴史上で著名な仏陀はゴータマ・仏陀すなわちお釈迦様です。

では仏陀が目覚めた「真理」とは何かは古来より「自他一如」（自他一体）の真理といわれています。では自他一如の真理とは、どういう真理なのか、やや難しくなりますが、述べてみたいと思います。

――自他一如の真理とは、見るものと見られるものは離しがたく一つである、聞くものと聞かれるもの（音）とは一体である、知るものと知られるものは一如である、という真理です。これを極く日常的なことで申しますと、たとえば、庭にある桃色のベコニアの花が美しいという経験に於て、ベコニアとそれを意識している働きとは離しがたく一つです。逆に、まず私というものがいて、その外にベコニアがあって私がベコニアを認識した、すなわちまず私があってこの私が外の自然や他者に関わっている、などと思っているのは自と他を分離して考えているのです。「ベコニアが咲いている」ということとそれを見ている「私がいる」ということとは一つの事象であります。「庭にベコニアが咲いていて、それを私が見ている」というのは、最初の瞬間の経験を後から反省して「庭のベコニア」と〈私〉を分けて考えているのです。バッハのマタイ受難曲を聴いているという経験で、マタイとそれを聴いている私とは、聴いている経験があるだけで、〈聴く〉と〈マタイ〉とはその場合、一つの経験の持続です。大体、〈聴く〉なくして音曲そのものも成立しません。こういうことで環境は私（主体）と不可分なのです。知るものがあって知られるものがあり、知られるものがあって、知るものがあるのです。もし知られるものを全て剥ぎ取ってしまったら知る働きはあり得ません。たとえ真っ暗になったとしても、その真っ暗さえ知る心を離れてはありえません。知る働きと知られる世界とは一つの事象の二面です。――

こういう自他一如の真理に完全に目覚めたお方が仏陀です。知られつつある全体（世

界）は知るものと一体であり全内容ですから、「私は世界であり、世界は私である」ともいえます。このように知る智慧は他者や他の生き物を全ては自分の生の内容になりますから、一切衆生は私のいのちの内容にほかならず、生きとし生けるものは〈我がものであり我が子〉なのであります。そこに自他一如の智慧は同時に大慈の働きとなります。『仏説無量寿経』には

「もろもろの衆生において、視わすこと自己のごとし。」

と佛智の内容が説かれています。一切衆生を自己の如く感知している仏の智慧には慈悲の徳が具わっています。こういう智慧と慈悲の徳の円満なお方が佛でありましょう。

ただ、自他一体と覚って「世界は私であり、私は世界である」「あなたは私であり、私はあなたである」というのが覚りの智慧でありましょうが、この世に生きられたゴータマ・仏陀（釈尊は）この覚りの智慧を得ても現実社会を生きていく一人の人である場合、もし「あなたは私であり、私はあなたである」という智慧だけでは一人の人の身において生きることは困難です。あなたの所有物を私の物として取り扱うわけにはいきません。私の身とあなたの身、私に所属する物とあなたに所属する物との区別が一応必要です。そうでないと社会生活はできません。ですから自他一体の悟りを開いた釈尊も、さとりの智慧をもちながら、しかし自我の心（分別心）を同時にもって生きられたのです。自我は自他を区別し、判断し選択する機能です。

ただ釈尊の場合、自我を持っていながら、自我に対する執着はなかったのです。ですから人である限り自他一如の智慧を得ても、この世に生きる限り自他を区別して考える自我は必要なのです。

ただし凡夫は自我しか知りませんから、自他を切り離し、切り離された自分に深く執着して、貪欲と瞋恚の煩悩に染められてしまいます。

ところで「真宗で仏になるとは」ということですが、現実の身を持っている凡夫にはこの世で釈尊のような悟りの智慧を得ることはとうていできません。仏にはなりえません。ですから、真宗では死して浄土に生まれて仏になるといわれます。浄土は涅槃界ですが、宗祖は

「涅槃界というは、無明のまどいをひるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。界は、さかいという。さとりをひらくさかいなり。」（唯信鈔文意）

と仰せられ、浄土は自他一如の覚りを完全に開く境界であります。浄土では肉体としての身をもちませんから、自他一体の覚りを開くといわれ、それを「弥陀同体の覚り」を得ると言われます。アミダ仏と同じ覚りですから、このさとりを無上涅槃のさとりともいわれます。肉体的な身を持たない真理そのものの身となるのですから法身とも無上佛になるともいわれます。（無上涅槃を無余涅槃といい、人の身に生きた釈尊の場合の涅槃は肉体としての身（自我）があります）から有余涅槃といわれます）

ところで真宗では浄土に生まれると大涅槃をさとる、すなわち無上佛になるともいわれますが、なぜ大涅槃をさとることができるかと申しますと、南無阿弥陀仏をいただいた信心には仏の智慧と慈悲の境界である大涅槃界と同質の智慧（自他一如の智慧）がこもっていますから、南無阿弥陀仏をいただいた信心の人はこの身が終わる時（臨終一念）に信心の智慧は開花して大涅槃を覚ることができる、いわば無上佛になるといわれています。

私たちに与えられる南無阿弥陀仏は法蔵菩薩の願行によって仏の智慧と慈悲の無上の功徳がこもっているからです。

そこで宗祖は

「この行はすなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの善本を具せり。極速円満す、真如一実の功徳の宝海なり」（『教行証文類』行巻）

と仰せられ、『ご和讃』には

「智慧の念仏うることは
法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば
いかでか涅槃をさとらまし」

と仰せられています。この南無阿弥陀仏にはアミダ仏の智慧（自他一如、無分別智）の徳がこもっていて、この智慧が念仏を信じる信心として衆生の上に与えられ、衆生のものになります。衆生は信心の智慧をいただいたのですから、この智慧は佛の智慧と同質の智慧であって、この信心の智慧が佛になる因となってくださいます。これによって、浄土に生まれて大涅槃の覚りを得るのであります。ひとたび浄土に生まれて大涅槃の覚りを開き、自他一如に完全に目覚めた仏になったら、そこに一切衆生を我が子のように慈しむ無量の慈悲が用き出してきます。一切衆生の苦しみや悩みに共感し、全てのものに真の安らぎを与えたい、同じ仏にしたいという慈悲の活動となって無窮に働くものとなります。

こうして「佛になるとは」その究極は限りない慈悲の用きをなすものとなるのであり、その内実は自他一如の完全な智慧いわば無上仏智（無分別智）そのものであります。このような仏にならしていただけるのが念仏の信心です。